

# 吉祥院子ども六齋 で学んだこと

清水 美優 (19歳)

六齋歴史研究会獅子の如く編集部



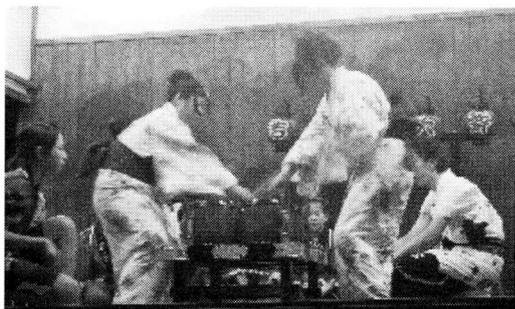
## 伝統を受け継ぐことの大切さと難しさ

小学生の時に六齋を始め、もう12年目になります。最初の頃の辛かった思い出は忘れられません。厳しいおっちゃんに太鼓を習い、お母さんに叱られながら、必至に練習していました。「どうしてここまでして太鼓をしなければいけないのか」と思う時もありました。でも今では、あの時辞めずに六齋を続けていて本当に良かったと思っています。何か一つ、自分が小さい頃から頑張ってきたことがあるということは、とても自信になっています。

それに地域の人たちとの繋がりがいかに大切なことであるのか、最近になり、ようやく分かってきました。幼い頃は、近所のお姉さんやお兄さんに、手を持ってもらい太鼓を叩いていましたが、今や私たちが小さい子ども

たちを指導していく立場です。その子たちが大きくなった時、次の世代へと繋いでいけるように活動して欲しいと思っています。そんなことを思えるようになったのも子ども六齋に参加し、伝統の大切さを学ぶことが出来たからだと感じています。私にとって子ども六齋という場は、太鼓を練習し、お祭りで発表するだけのものではありません。大切な友だち、仲間との絆を深め合えるとても大事な場所です。違う高校に進学し、疎遠となってもおかしくなかった幼馴染たちと会える場所です。一つの目標に向かって一緒に頑張るといふ経験は、学校でも出来ませんが、同じ地域、環境で育ち同じことを一生を通して活動することは、なかなか出来ることではないと思います。一生大切に出来る友だちに私はもう出会うことが出来ました。そして子ども六齋の活動を通して、その絆を確かなものにししました。私が学んだことは、一つのことを諦めず続けること、伝統を受け継ぐことの大切さと難しさ、そして友だちを重んずる気持ちです。

このような素晴らしいことを学べた子ども六齋に感謝し、そしてこれからも子どもたちにとって大切な存在であり続けられるよう自分に出来ることを精一杯頑張っていきます。



西片里紗

清水美優

吉祥院子ども六齋会の発足により、再び活動が盛んになりつつあったが、近年は参加する子どもも減少する。

市内全体に目を向けても戦後以降、六齋念仏の衰退化は続いている。

最盛期には、吉祥院地域内でも七組の六齋組があったものの、現在では菅原組を残すのみとなっていることから衰退傾向は窺い知れるであろう。

この厳しい状況をいち早く感じ取っている一人が美優である。彼女は、責任感が強く、周りの状況をしっかり捉え、すぐに行動に移す、まさに『感即動』精神である。

伝統芸能「六齋」を受け継ぐ大切さ、継承と発展に、自分たちはどのような行動が必要なのか、既に彼女の頭の中には、はっきりとした考えが描かれている。